

対魔少女と逆行時計

半熟紳士

1

妖魔

それは人の世を犯す異形の怪物。

彼らには人の世の道理は通用せず、彼らの前では人はただの脆弱な餌に過ぎない。

食物連鎖のピラミッドの頂点に君臨するのは人間であると信じて疑わない者達は、妖魔の存在を目の当たりにしたことがない故に、そのような結論を導き出せる。

もつとも、目の当たりにした時というのは、彼らの人生にエンドロールが流れる時であろう。

おめでたい彼らの断末魔が、

「そんなバカな！」

なのか、

「ありえぬわ……!!」

なのか、

「ぬわー!!」

なのかは定かではない。

だがえてして、理不尽と恐怖がない交ぜになった勘定を抱いて死んでいくと言うのは共通している。

では、人間はただ食われるだけの存在だけなのだろうか。

無論、否である。

人間が小虫の一刺しで天に召されることがあるように、下にいる者が上にいる者を降すことは珍しい話ではない。

もしそうで無かったら、日本史の教科書は最も妖魔が栄えていた平安時代あたりで「完」だっただろう。

遙か昔から、人間は妖魔に対抗する技術の研鑽を重ね、それらを次世代へと託していった。

エクソシスト、退魔師、陰陽師、ヴァンパイアハンター。

妖魔の存在が表沙汰にならなくなった今でも、魔に抗う者達は終わりのない戦いに身を投じていた――

1

2

「あー、どっかにエロ本落っこちてねえかなー」

全国一千万人いるかどうか定かではない男子高校生が誰でも思い

浮かぶが、声を大にして言うことは殆ど無いことを、ちがさきちぐさ千ヶ崎千草は

口にした。

ルックスはイケメンと言っても差し支えない程整い、背も高く、ファッション誌の表紙を飾っても特に違和感はないモデルのような男である。

「在籍している勝山高校では、

「顔だけは無駄にいい男」

「外見詐欺」

「外と中の釣り合いが取れていない男」

と、もっぱらの評判である。

しかしどう言う訳か、男女交際に発展したと言う記憶は、千草の脳内ライブラリーには一切記録されていなかった。

「小学生の時にはちよくちよくあつたんだけど、最近じゃとんと見かけねえよな。つたく、恨むぜ、あの時エロに目覚めてなかった俺」

「……何アホなこと言ってるのよバカ千草。これから仕事だつてこ
と、ちゃんと分かっているの？」

隣を歩いている女子生徒が、あきれ顔で怪人煩惱男を見ていた。

女子生徒の名は、しのみやしの四宮信乃。

千草の幼なじみにして、この地域一帯に縄張りを張っている四宮組の若き当主——それが、彼女の表向きの姿である。

裏向きにしくちやいけないうところが表になっている気がするが、まあ些末な問題であろう。

性格は、反感を買わない程度の優等生と言ったところか。（何故

か千草には妙に厳しい）

その整った容姿も相まって、男女問わずかなりの人気を得ている。

靴箱にラブレターが入っているのも、決して珍しい話では無い。

何気に女子の比率が高かったりする。（千草調べ）

ごくたまに藁人形や「くたばれ」と羅列してあるラブレターを頂戴している身としては、羨ましい限りだ、と千草は思ったたりしている。

「どうしたんだよそんなピリピリして。アレか。カルシウム不足って奴か。やつぱ牛乳飲んどいた方がいいぜ。キレにくくなるし、そのちっさい胸も——」

言い終わるよりも速く、脳が揺れた。

信乃が肩にかけていた竹刀袋で思いつ切りぶん殴ったのである。

「根拠もないこと言ってるじゃ無いわよ！ 大体ねえ、牛乳飲んだつて殆ど効果ないんだから！」

「ソースは？」

「あたしよ！ って何言わせてんのよ！？」

「オーケイ落ち着こう。争いは割と便利な道具を産むけど、今回はそれに該当しないっばい。つーか、今ここで俺が怪我したら、色々面倒になるってこと忘れてないよな？」

「……分かったわよ」

渋々振り上げていた竹刀袋を降ろしたのを見て、ほっと胸をなで下ろす。

「ボコるのは仕事終わってからにする」
無念、死刑執行が長引いただけだった。

「まあ冗談はさておき」

「冗談かどうか決めるのってあたしよね!？」

「チッ」

誤魔化すのは失敗したようである。

仕方ない。

仕事が終わったら、何か甘い物でも奢って機嫌を取ろう。

「……ロイヤルスイートポテト。パフェなら許してあげる」

「げっ」

確かそれは千二百円するブルジョワ極まりないスイーツだったはず。

所持金を確認する。

残金千三百円。

絶妙に手を届く値段なのが恨めしいが、背に腹はかえられないのもまた事実である。

「……オーケイ、分かりましたよお嬢様」

「ん、よろしい」

次のお小遣いまでかなりの日数があるが、この仕事で報酬が懐に入るの、金欠になることはあるまい。

ちゃんと仕事を完了できれば、の話であるが。

今回の二人の「仕事場」は、駅から少しばかり離れた場所に建っている、三階建ての廃ビルだった。

随分と古い建物なのか、コンクリートの壁に所々ヒビが入り、植物のツタが張り巡らされている。

お世辞にも、入ってみたいとは到底思えない代物だ。

「なんともはや、ホラー映画のセットですよと言わんばかりだな。

ここで撮影したら、さぞかし臨場感溢れるシーンが撮れそうだけ。

例えば、キャストや撮影班がグチャグチャにされるとかかな」

「バカなこと言わないの。本当にここで死んでいる人が何人もいるんだからね?」

「事故って線はねーのか?」

「どんな事故があったら、ミンチ状になった死体なんて出てくんのよ」

ぴらっと、信乃が一枚の写真を撮りだした瞬間、全力で目を背けた。

この仕事をやっている以上、その手の死体は嫌でも見慣れることになる。

が、見ていて気持ちのいいものではないので、なるだけ全力でお目にかけてくれないと言うのが正直なところだった。

「そりや電車に轢かれたらそうなるんじゃないやねえの?」

「ここは駅じゃなくてビルでしょ」

「てことは?」

「妖魔ね。ほぼ確実に」

「ほーん……って信乃。爪、噛んでるぞ」

「へあ?」

信乃は慌てて、口から親指を離した。

イライラしたり考え事をするときに、よく親指の爪を噛むのだ。

小さい頃からのクセなのだが、本人は恥ずかしい事と思っているらしく、必死に矯正したがついている。

もつとも、そう簡単に止められないのがクセがクセたる由縁なのだが。

耳を赤くしながら、信乃はリュックからこの廃ビルに関する情報が入っている封筒を取り出した。

「また見るのか？」

「一度見たからって、全て覚えられる訳ないでしょ」

「そりゃ同感だな。そうじゃ無かつたら、俺が赤点ギリギリを取りまくってる道理がねえ」

「それはただの勉強不足でしょ」

ん、と千草にも資料を渡してくる。

わざわざ二人分コピーしてきたらしい。

千草はこの手の資料に目を通すことは殆ど無く、信乃の話の適当に頭に入れていく程度で十分なのだが、どうも信乃はそれでは納得していないようだ。

手間をかけてくれた分、無下に突き返すこともできないので、渋々目を通すことにした。

資料によれば、このビルは十年前までは小さな刃物メーカーだったらしい。

しかし一人の社員が、ある日突然自殺。

それをきっかけに不審死が相次ぐようになり、この会社は呪われていると噂が立つようになる。

そして最初の社員が自殺した一年後、夜逃げするように会社は倒産。

それ以降も、面白半分でここに訪れた人間が次々と悲惨な死を遂げていた。

「なんで今になって依頼が転がり込んできたんだ？」

「もう少しで取り壊す予定なんだって。妖魔が潜んでいたら、解体工事中に何人も死人が出ることになるでしょ？」

「そこで対魔師の出番って訳か。ま、その妖魔ぶっ殺せば金が転がり込んでくるんだから、悪い話じゃねーよな」

対魔師

それが、信乃の裏の顔。

異形と相対する人間の中でも、トップクラスのキワモノと評される者達だ。

「お小遣い稼ぎじゃないのよ。あたし達が戦ってるのは」

「へいへい。世のため人のため、だろ」

「そう言うこと。それは忘れちゃだめなんだから」

忘れるも何も、千草はそんなもののために戦った記憶は一つも無い。

そしてこれからもそうだろう。

見知らぬ誰かのために命を賭ける酔狂な輩なんて、千草はこの十六年の人生で一人しかお目にかかったことが無い。

「ま、御託はいいけど、さっさと片付けようぜ」

そう言って、リュックから取り出した護符を壁に貼り付けた。

護符に記された術式が僅かに光を帯びる。

「うっし、ちゃんと起動した」

この護符が健在である限り、貼り付けた対象を強制的に第三者の意識から外すことが出来る。

例え目の前で大爆発を起こそうと、異常を気取られる事は無い。

(護符が吹っ飛ばされてなければだが)。

ちなみに貼り付ける対象は生物も含まれる。

かつてこれを悪用し、自分に貼って幼なじみが風呂に入っているのを覗き見んとするという非常に嘆かわしい事件が起こったが、幸いにも被害者が風呂に入る前に付いたため、犯行は未然に防がれた。

ちなみに犯行に及んだ当時中学二年の少年T (少年法により本名は伏せる) 被告は、

「好奇心に勝てなかった。反省はしていない」

と容疑を認め、被害者兼執行人である少女Sは、

「うっさい死ねばか」

と下手人をしばき倒したという。

この一件で、護符の有効性に疑問が保たれたが、結局信乃——もとい少女Sの感知能力がおかしいと言うことで落ち着いた。

尚、覗きは軽犯罪法1条23号にある通り立派な犯罪なので、読者諸兄は絶対に真似しないようにしていただきたい。

3

寂れた黴の匂いが、鼻を突いた。

ビルの内装は、外と負けず劣らずの廃墟っぷりだった。

コンクリートがむき出しになった壁は至る所が崩れ落ち、床にはガラスの破片が散乱している。

裸足で駆け回ろうものなら、二分と立たないうちに救急箱のご厄介になるだろう。

ガラスの大半が割れているというのに、中には陽光が殆ど差し込んでおらず、薄暗い。

「どうする信乃。手分けして探すか？」

「駄目。まだ相手の実力がどんなものか分かってないんだから。それに、バックアップのあんたがいなくちゃ、いざって時に手遅れになるかもでしょ」

一振りの日本刀を取り出し、腰に差しながら返答する。

竹刀袋でカムフラージュしていたこの刀こそ、対魔師である信乃の最大の武器、妖刀村雨。

対魔師と言うことで、これらの武器を携帯する許可は取ってはいらぬものの、街中でむき出しに持ち歩いたら、何らかのトラブルに巻き込まれかねないのだ。

「その『いざって時』とやらが来るのは、勘弁して欲しいんだけどな……ま、わーったよ。おまえと一緒にいればいいんだろ……おま

えと一緒にいれば」

「……なんで二回言ったのよ」

「いや、これって状況によっちゃ結構いい感じの台詞だなーと思っ
て」

「それで全て台無しよ！」

そんな他愛のないやりとりを挟んではいるものの、二人は気を抜
いていない。

まだ存在が確認されていない敵の一挙手一投足を聞き逃すまい
と、神経をとがらせていた。

「——ん」

先にその音に気付いたのは信乃だった。

「どうしむぐあつ」

口を塞がれたことを抗議する千草を無視して、部屋の隅に置いて
あったロッカーへと近づいていく。

近づかれていることに動揺したのか、ガタツとロッカーが揺れ、
一拍おいて中から一人の少年が飛び出してきた。

その手に握られているのは、彼の身の丈はある鉄パイプ。

少年は目をつむったまま、躊躇いなくそれを振り下ろした。

「——っ」

信乃を押しつけ、右腕でそれを受けた。

「がっ……」

みしやり、と言う嫌な音と友に、痺れるような痛みが全身を駆け
巡る。

筋がいい訳では無いが、この一撃には躊躇いがない、分ダメージも
バカにならなかった。

「こんのっ……！」

痛みを普段縁に使わない根性でねじ伏せ、鉄パイプを奪い取る。
それだけで終わらせるつもりは毛頭無い。

やられたら老若男女問わず色を付けてやり返すのが千草のポリシ
ーである。

拳を固め、少年に向かって殴りかかろうとしたとき、視界が回転
し、思いつ切り床にたたき付けられた。

肺から酸素が全て抜け出したような錯覚を覚える。

「し、信乃てめえ、何しやがんだ……」

「それはこっちの台詞よ。庇ってくれたのはありがとだけど、子
供をぶん殴るのは話が違うんだから」

肩をすくめる信乃の手には、鞆に収まったままの村雨が握られて
いる。

それ使って千草の足を払ったのだ。

「バカヤロー、ありやどう考えたって正当防衛だろうが」

「過剰防衛よ。鉄パイプ奪うだけで十分だったでしょ」

ナメられたらおしめーだろうよーとブチブチ文句を言っている千
草を無視して、少年と視線が合うように屈み込む。

「……えーと、大丈夫？ 怪我は無い？」

少年はぱちぱちと二人を交互に眺めていたが、こくりと頷いた。
「申し訳ありません。少しばかり取り乱してしまいました……それ

で、貴方たちは何者なんです？」

「え？」

困った、と頬を掻く。

対魔師は別に犯罪者集団という訳では無いが、その性質上限りなくグレーな存在であり、一般人の認知度は限りなく低い。

表向きの職業であるヤクザを名乗る……駄目だ絶対に怖がらせてしまう。

「もしかして、あの化物を倒しに来たんですか？」

「え？ ああうん、そうだよ」

「そうですか……いやはや助かりました」

ほっと胸をなで下ろしているが、少年の表情にはあまり変化が見られない。

「すみません。昔から感情の変化に疎いもので」

「え？ 別に怒ってないよ？」

「いえ、あのお兄さんが気難しげな顔を」

「あいつはいーの。いつもあんな感じだから」

「いつもじゃねーよ！ 鉄パイプで殴られりゃあ誰だってこんな顔にもなるわ！ つーか、こいつをどうするつもりだよ」

「決まってるでしょ。助けるのよ……ってなによその顔」

思いつ切り渋面を作る千草の言わんとしていることは大体分かる。

そしてそれが、自分とは相容れないものであるということも。

「俺は御免だね。なんだって縁もゆかりも無いガキを助けなきゃい

けないんだ」

「あのねえ……あたし達対魔師が何のためにいるか忘れたわけじゃないでしょ」

「知ってるよ。妖魔をぶつ殺すってことだろ？」

「違うでしょ。妖魔から人を守る、それが対魔師じゃない」

内心舌打ちする。

引き剥がしに掛かるものなら、けちよんけちよんにされるのは千草の方である。

おまけに信乃はお人好しの頑固者。

一度助けると決めたら何でも動かないことは、十六年の付き合いで嫌というほど思い知らされている。

「……わーったよ、助けていんだったらおまえの好きにすればいい。けど、俺はずえっつたいに協力しないからな」

「ん、ありがと」

急に険しい顔を引っ込められては、どうにも反応に困る。

とは言え、二人が衝突することはさして珍しいことではなかった。

それぞれ違う理由で戦っているのだから、ズレが生じるのは無理もないことだが――

『――ンンン？ ようやくお出ましかよオ』

人のもとは思えない奇妙な声音に、二人は得物を構えた。

天井から黒い染みが広がり、中から毒々しい緑色の皮膚の妖魔が吐き出される。

手は四本。

ボサボサの髪の下にある二つの目は、握り拳くらいはあるだろう。

信乃は少年を庇うようにして前に出る。

『待つて待つて待ちくたびれたぜエ。対魔師ツて奴が来るツていうから楽しみにしてたのよオ。来たのはチビたガキ共だった時のオレの落胆、分かってくれるかア?』

そう言つて、顔をゆがめる。

笑っているのだろう。

だが信乃は、その対極の勘定を抱いていた。

すなわち——ド怒りである。

「千草、予定変更。この子をお願い」

「はあ? おい待て信乃——!」

千草の声を無視して、信乃は床を蹴り一気に肉薄する。

村雨を抜刀し、妖魔の腕を一瞬にして切り飛ばした。

『おオウ!? 速エ速エ。でも案外、大した事ねエナア!』

思わず舌打ちした。

この妖魔、まるで苦しんでいない。

愛刀の村雨は、切断のダメージに加え、妖魔に激痛を与えるという効果を持っているが、それが効いていない。

痛みを感じていないのか、はたまた感じていてもそれを悦びと感じているのか。

どっちにしろ、厄介な事に変わりはない。

ボコボコと四本の腕がうごめき、錆び付いた刃物が次々と生えてくる。

それらは不可思議な軌道を描き、信乃に襲いかかる。

タイミングはすべて同じ——だが、軌道が読みにくい。

それでも一撃も受けていないのは、信乃が持つ高い敏捷性のお陰だろう。

伸縮自在な四本の腕と不規則な動きがのせいで、対処するのにやや手が焼けるが、それでも拮抗状態に持つていけている。

単純な身体能力ならば、信乃の方が上だ。

それでも決め手に欠けるのは、妖魔はそれらを補う能力を十二分に持っているからだろう。

妖魔の再生能力も速く、先程切り飛ばした腕も修復が終わり、錆びた刃が次々と生えてきている。

しまいには、迸る血でさえも刃に変じて、襲いかかってくる始末だ。

『まアだ、終わらないぜエ! もっと楽しませてくれよオ!』

矢継ぎ早に、妖魔の腕が撃ち出される。

今度は、すべて直線の攻撃。

愚直と言えば愚直だが、小細工が少ない分、そのスピードは楽観的に見える者ではない。

身体を捻り、一本の腕に村雨を突き刺した。

伸びていくことで、勝手に傷が広がっていく寸法だが、痛みをものもしない相手には、あまり賢い選択ではないことを思い出す。

「なんて、間抜け……！」

それと同時に、脇腹がに僅かな衝撃と、沸騰した感覚が走る。

『はッはア！ 後ろにもご用心だぜエ！』

通過した腕の一本が急旋回し、信乃を背後から襲ったのだ。

歯を食いしばり、腕を切り飛ばした後、刃を引き抜いた。

錆び付いた刃は切れ味こそ悪いが、与える苦痛はこちらの方が遙かに上。

江戸時代には、罪人の処刑用にわざわざ使われていた程だ。

制服に赤い染みが広がり、空気が傷口を舐める。

思わず顔をゆがめながらも、信乃は構えを崩さない。

その目に灯る闘志もまた、僅かにも揺らいではない。

『あつれエ、おかしいなア。さっきので殺せるはずなんだけどよ

オ』

「冗談。こんなの、かすり傷だつての……！」

そう呼ぶにはやや深いことは自分にも分かるが、これくらいで音を上げるなんて選択肢はのっけから存在していない。

それと同時に、目の前の妖魔から感じる気持ち悪さの正体を、未だに掴めないでいた。

この気持ち悪さと言うのは、何も外見の話ではない。

妖魔の大半は、人にとって恐怖や不快感を抱かせるような外見をしているので、信乃にとってすで見慣れたものになっている。

だが、この妖魔のから感じるそれは、つかみ所の無い得体の知れ無さだった。

何か勘違いをしている気がする。

それも、かなり致命的なことを――

4

「だークソツ！ なんだってこんなガキのお守りなんかしなきゃいけないーんだよ！」

答えは簡単、信乃に頼まれたからである。

千草にとってこの少年は、非常にどうでもいい存在である。

妖魔に殺されようが、罪悪感が湧くわけでもない。

しかし信乃に頼まれてしまった手前、おいそれと見捨てる訳にもいかない。

予定通りだったら、信乃と一緒に妖魔と戦っていたというのにもこの様である。

そして何より、

「なんだって、外に出られないんだよ……！」

妖魔と遭遇したのは二階のはずだ。

しかし千草達は、階段にすら到達できていない。

明らかに、何かがおかしい。

「妖魔の結界か……？ くっそ、どこがどこかさッパリだ」

妖魔の中には、結界を展開し自分に有利な環境を作り出す者もいる。

結界を解くには、主である妖魔を倒す必要があるのだが、どうも

違和感が胸につつかえていた。

結界を作り出すことが出来る妖魔は、極めて強力な個体に限られる。

だがあの妖魔は、そこまで強いとは思えない。

よくて中の上止まりのあの個体が、何故結界を展開できているのだろうか……？

「ふーむ、中々に面妖ですね。死にかけるのは不幸ですが、このような未知の体験を味わえるとは。怪我の功名とはまさにこのことですね」

「このガキ、マジで置いていつてやろうか」

「それは勘弁してください。老衰以外では死にたくないものですか」

少年はかなりふてぶてしかった。

そろそろこのガキ放り出して信乃の所へ向かってやろうかと思いはじめたその時、

「……ッ！」

表情筋が引きつっているのが自分でも分かった。

暗がりから姿を現したのは、件の妖魔だったのだ。

『よオ、数分ぶりだなア。会いたかったぜエ』

「……生憎と、俺は死ぬまで会いたくなかったよ」

皮肉を飛ばしながら、一步後退する。

同一個体か、それともただの分身か。

そうであるならば、信乃から逃げたか——信乃が殺されたか。

後者の可能性を頭を振って追い出した。

信乃がこんな奴に負けるはずがない。

つか負けて死んだら絶対に許さん。

地獄なり天国なりにカチコミかけて、いやでも現世に引きずり戻してやる。

『安心しろよオ。あの女はまだ生きてるぜエ。まア、それも時間の問題だけだなア』

不快極まりない笑い声。

双方の機嫌は、見事に反比例していた。

「……ああそうかい。信乃の奴もひでえ奴だな」

『どう言うことだア？』

ニヤリ、と相手が思いつ切りムカつくであろう笑みを浮かべ、千草は言った。

草は言った。

「そりゃあ、おまえみたいな万年下級妖魔に、勝てるかもなんてアホな幻想持たせちまうんだぜ？ 現実を見せるってのも大切だろうにな」

空気が、一瞬にして凍り付いた。

今までニタニタ笑っていた妖魔は顔を伏せ、ぶるぶると小刻みに

震えさせている。

『黙れエ……黙れよオオオオオオオ！』

撃ち出された妖魔の腕が、千草の身体を貫いた。

「が、ふっ……」

行き場を失った血液達が、口から逃げ出していく。

「おや、大丈夫ですか？」

「もうちよつと、言葉に感情込めてくれよ……まあ、こんな雑魚の攻撃、どうってこと、ないぜ……」

どう見ても空元気には見えなかった。

千草の顔は徐々に青ざめていく。

『タダでは殺さねエぞガキイ……！ オレを見下す奴はア、トコトングチャグチャにして殺してやるウ……』

殺意に濁った眼球が、千草の姿を捉える。

「なる、ほどな……ようやく分かったぜ。おまえ、元々人間だったんだろ」

びくり、と妖魔の身体が震える。

腹部に風穴が開いているにも関わらず、千草は笑った。

鎌をかけてみたのだが、どうやら凶星だったようだ。

妖魔の中には、人間の魂が変質した者もいる。

反応を見る限り、生前は自分の立場にかなりのコンプレックスを抱いていたようだ。

それは妖魔の力を手にしたとしても、そう簡単に拭えるものではない。無かったらしい。

「大方、この建物にいた人間に恨みを抱いてたクチャか……？ 妖魔になつて復讐は成功して十年間、ここで一人イキリまくってたって訳かよ……はっ、小せえ小せえ。妖魔になつても雑魚なまんまっつてのは、哀れすぎて笑っちゃまうぜ」

勘に触る言葉だけを選び、妖魔にぶつけていく。

妖魔の身体に青筋が浮かび、臨界状態なのは火を見るよりなんとやらだ。

一応、千草も対魔師の助手。

戦う手段が無い訳ではないが——今は、それも難しい。

拳を固め相手の出方を伺うが、予想に反して妖魔は動かない。

眉を潜めた瞬間、足場が割れた。

「なあ——っ!？」

視線を落とすと、そこにあつたのは巨大な口。

歯は見受けられない。

飲み込むことに特化させたようなそんな口だった。

「クソツ、そういうことかよ……!」

憎まれ口を叩いたのと同時に、千草の視界は黒に染まった。

5

妖魔を滅する技を対魔術と言うが、その中でも、信乃達四宮家を中心に使用者が多い対魔術が、術式を武器に乗せて叩き込むことを得意とする四宮流だ。

「——燕返し」

神速の連撃。

瞬く間に妖魔の体が三つに分断される。

かつて、伝説上の剣士が使っていたとされる技を、先代の四宮家当主が再現した対魔術だ。

使い勝手がいいので、信乃も重宝しているのだが――

「――おかしい」

妖魔の亡骸に視線を落としながら、信乃は首をかしげた。

妖魔の動きは確かにトリッキーだが、動きさえ頭に入れてしまえば、そこまで強力なものではなかった

攻撃を受けたのも、背後に受けた刃が最後になる。

だが、

「――っ！」

後方から飛来した刃を、村雨で弾く。

振り向くとそこには、先程殺したはずの妖魔の姿があった。

『んア？ 無反応なんてつねえなア』

「……」

無反応にもなる。

これと同様のことが、これまで五回もあったのだから。

殺しても殺しても、妖魔は何食わぬ顔で復活する。

頬に伝う汗を拭う。

体力には自信があるが、底なしという訳では無い。

どう足掻いてもジリ貧になるのは明白だ。

この妖魔を殺すには、何か別のアプローチが必要になるだろう。

『諦めろって、なア？ ここに来た時点で、おまえらの負けは決ま

つてたようなモンだって分かったらオ？ あのカギはオレよりオマ

エが強いとかほざいてたけどなア』

「馬鹿言わないで。そう簡単にホイホイ諦めたら、商売上がったたり

なのよ――！」

『そんならよオ……これを避けることが出来るかア！？』

天井、壁、床、ありとあらゆる場所が黒く波打つ。

妖魔が新たに湧き出す兆候。

撃ち出された腕の数は、優に百を超えよう。

死角は存在せず、標的を瞬く間に肉塊へと変貌させる必殺の一

撃。

一つ一つの威力はそれ程でもないが、あまりにも量が多い。

多勢に無勢。

そんな言葉が、信乃の脳裏をよぎる。

それと同時に思う。

それがどうしたと――！

「籠鳥逸出――！」

一陣の風が、群がる腕を次々と刻んでいく。

毒々しい色味の鮮血が身体を染め上げていくのも意に介さず、信

乃は村雨を振るい続ける。

全方位を余すところなく切り刻むこの対魔術は、妖魔の攻撃を完

全に防ぎきって見せた。

僅かに身体がよろめくが、村雨を地面に突き立て身体を支えた。

『ぎッ……』

僅かに、妖魔の顔が歪む。

「まだ、まだあ……！」

視界を侵食しようとする血を乱暴に拭い、駆け出す。

何回生き返ろうが関係無い。

絶対に、殺す——！

『ま、待てエ！』

待つ義理なんて無い。

だが、従わなければ最悪な事態が起これると本能で感じ取ったのか、信乃の足は止まっていた。

「……何。命乞いなら聞かないわよ」

悪辣な妖魔にかける情は、さすがの信乃も持ち合わせてはいない。

だが妖魔は、引きつった笑いを浮かべながら口を開く。

『実はなア……オレは今、アンタの仲間を捕らえてんだよオ』

「……！」

口の中が、一瞬で乾いた。

村雨がカタカタと震えている。

いや、違う。

震えているのは自分の手だ。

『安心しろよオ。抵抗しなけりや、あのでつけえガキは助けてやらア……つってもあのガキ、腹に穴ブチ開けられてるから、長くは保たないかもだがなア！』

身体から熱が奪われていく。

命を切り捨てるができないのが、信乃の弱さだった。

最強にして最弱の対魔師と言われる理由が、ここにある。

振るわれた妖魔の腕が、信乃の身体を打つ。

禄に受身も取らずに、信乃は床を派手に転がっていく。

散乱していた瓦礫や硝子が肉を抉り、血が流れる。

迫る追撃を、なんとか村雨で受け止めるが、その動きは先程までの鋭さは微塵も感じられない。

防戦一方。

今の信乃は、ただのサンドバックだった。

傷が増え、疲労も蓄積している。

『はっはア、さつきまでの威勢はどこへやらだなア。そんなに仲間が大事なのかよオ？』

真つ赤になった拳を、皮が突き破れんばかりに握りしめる。

「大事に、決まっているじゃない……！」

千草は、千草だけは、絶対に守る。

例え自分が死んだとしても。

それが千草を——してしまった自分が負うべき責任だ。

だがそれでも、救う手立てが思い浮かばない。

千草だけなら、まだ対処はできた。

でも人質は千草だけでは無く、あの少年もいる。

下手に動くことはできない。

『やっぱり情に流される奴はやりやすいよなア。これでオレの殺人カウントは記念すべき二十だぜエ。アンタの死体は、オレが……いい感じに有効活用してやるよオ……！』

再び、空間が黒く波打つ。

撃ち出された無数の腕は、確実に信乃の急所を狙っている。

——間に合わない。
妖魔の腕が、肉を抉る。
無機質なキャンパスが、真っ赤に、染まった。

6

「——さん、お兄さん」

激しく体を揺さぶられ、千草の意識は覚醒した。

「良かった。念仏を唱える手間が省きましたよ」

「はっ……あんな三下相手に俺がくたばるかよ」

「……」

「おい、なんだよそのワンチャンあるかもなーみたいな目は」

「ワンチャンあるかもなー」

「実際に言うんじゃねえよ！」

「そもそもお兄さん戦ってませんでしたよね。やったことと言え

ば、あの怪物を挑発しまくってズッポリやられたくらいですよね」

「やめんかその効果音」

少年に突っ込みを入れながら、体を起こした。

「大丈夫なんですか？ 普通に致命傷でしたよねアレ？」

普通の人間であれば、出血多量で確実に死に至る。

だが千草は、死ぬ気配がまるで無かった。

血の気が失せて真っ青になっていた顔色も、今では完全に健康そのものである。

極めつけには、体にぼっかり開いた大穴がどこにも見受けられなかった。

「これは一体……失礼、調べさせてもいいでしょうか」

そう言うやいなや、ぺたぺたと千草の体を触り始めた。

「おいバカ止めろ。男に触られる趣味はねえ」

ちなみに美少女なら大歓迎である。

ぐいっと少年の体を無理引き剥がす。

「そう言われましても。一度気になってしまうと調べずにはいられない性でして。ここに足を踏み入れたのも、廃墟の中はどうなっているか気になったのが理由ですし」

「おまえ、好奇心は猫を殺すって言葉知ってるか？」

「無論です」

「知っててなんで入ったんだよ！？」

「いいですか。故事成語を知っていたとしても、それを実践できる

かは別問題なのですよ？」

「何で俺が諭されてんだよ。今回の戦犯間違えなくおまえだから

な？」

「それはそれとして、ここは何処なのでしょう？」

「誤魔化し方が無理矢理だなオイ」

しかし状況把握が重要であることは千草も分かっている。

千草達が倒れていたのは、薄暗い小部屋のような場所だった。

いや、小部屋と言うには形がやや歪だ。

周囲を見渡してみれば、壊れた机やロッカーのような見受けられ

る。

「……なんか、怪物の胃袋みてーだな」

「胃袋ですか？」

「確証はねーけどな。俺達はあのでっけえ口の奴に食われたんだし、まあ間違っつてはいねえだろ」

「胃袋、ですか。それにしても胃液がどこにもありませんね」

「俺達を食うことが目的じゃないんだろ。じゃなかったら、おまえはとつくに死んでるよ。あいつの目的は、一時的に俺達を閉じ込めておくって事だな」

「何故そんなことを？」

「大方、人質だろうな。つたく、単細胞なクセしてこう言うときだけ知恵が回りやがる」

二人は今、妖魔の手中に収められている。

その気になれば、いつでも殺せると言わんばかりだ。

信乃はあの妖魔には負けない。

そう、人質さえいなければ。

「何故そう言い切れるのですか？ 躊躇わずに斬りかかる可能性もあるでしょう？」

「俺だったら確かにそうするな。でもあいつは、見知らぬガキが人質に取られたってだけでも、戦えなくなっちゃうんだよ」

忌々しげに吐き捨てる。

あのお人好しぶりは、最早病気の域だ。

そのくせ特效薬が皆無なのだから始末が悪い。

「だから覚悟しとけよ。万が一最悪な事態になりかけたら、俺がおまえを殺す。丁度、おまえから奪った鉄パイプもあるしな。さすがに死体になっちゃうまえ、あいつも躊躇うこともないだろうさ」

少年は確信する。

そのようなことが起きれば、千草は躊躇いなく自分を殺すと。遺言を考えておく必要があるなと思いつつ、少年は言う。

「なるほど。貴方は……ええと、信乃さんでしたっけ？ 彼女の事が好きなのですね」

「なんでそーなるかね。なんでも恋愛感情に結び付けるのはよろしくねー風潮だぜ」

「別に恋愛感情の好きとは誰も言っていないのですが」

「……」

なんか、おもいつきり、墓穴を、掘っていた。

「バカヤロー、そんなこと言ってる場合か。さっさと脱出する方法探すぞ、オーケイ？」

「ここまであからさまに誤魔化されると逆に清々しいですね」

「黙らっしやい。おまえだつて二ページ前にやってたろうが」

そう言いつつ、壁を思いつ切り殴る。

拳が腫れるくらいはあるだろうと思ったが、ゴムのような奇妙な感触と共に拳は壁にめり込み、ぶよんと跳ね返った。

「ただ殴っただけじゃ駄目か……」

妖魔が人質を使うとしたら、恐らく自分が不利になる局面。

そしてそれは、そう遠くないうちに訪れると確信できる。

「それまで、なんとか脱出しねえとな……っと、その前に下準備だ」

そう言って取り出した術式がびっしりと書き込まれた一メートルを超える長さの護符を、鉄パイプに巻き付けていく。

「おい、おまえはこれ付けとけ」

「え、なんですかこれ」

「説明してる時間はねえ。いいから付けろ」

「はあ」

千草から渡された物を、少年は不審そうに見ていたが、結局言うとおりにした。

「オーケイ準備完了……んじゃ、ぶちかますか」

そう言うが否や、千草は鉄パイプを振りかぶり、壁に向かって叩き付ける。

壁に鉄パイプがめり込むまでは、拳の時と同じだった。

だが次の瞬間、尋常じゃ無い衝撃が部屋を震わせた。

メガトーン

〈命我 熔音〉

刻まれた対魔術を、衝撃に乗せて妖魔に叩き付ける対魔符。

対魔術を殆ど使えない千草の数少ない武器だ。

どくん、と部屋が脈動を始める。

「うっし、ちゃんと効いてやがる……！」

メガトーン

逸る気持ちを〈命我 熔音〉に乗せ、次々と壁に叩き付けてい

く。

メガトーン

〈命我 熔音〉は人にとっては無害だが、妖魔にとっては爆弾を叩き付けられるようなもの。

一撃で死ぬことはないが、感じる痛みは尋常じゃないはずだ。

空間が悲鳴を上げ、亀裂が走る。

攻撃を始めてから数分後、空間は崩壊し、千草達は外へ吐き出された。

「うげっ」

「ぬっ」

揃ってくぐもった悲鳴を上げる。

「ふむ、どうも脱出には成功したようですね」

「このビルの外に出てりゃあ文句無かったんだけどな」

吐き出された場所は、二階の廊下。

この場所は覚えている。

曲がった先にあるのは、信乃がいた部屋だ。

スタート地点に逆戻りだが、再び脱出を図ろうという選択肢は、

千草の脳内には存在していなかった。

ここで踵を返せば手遅れになると、そんな根拠の無い予感が、千草の足下を絡め取っている。

「……いいか、おまえはここにいろ」

「え、それは困りますよ。盾……じゃないお兄さんがいないと死んじゃうじゃないですか」

「デメエが俺のことをどう思ってるかはよく分かったよ。ところでヒモ無しバンジーって興味あるか？」

「あれは中々にスリリングですよね」

まさかの経験者だった。

「……だーっ、とにかく俺が呼ぶまでここにいろ。今のおまえなら死ぬことはねえから、オーケイ？」

そう言って、千草は賭けだした。

風を切り裂く音が鼓膜を叩く。

だが村雨の音は、異様なまでに弱々しい。

何があったのか、嫌でも想像力がかき立てられる。

部屋の中へと転がり込む。

「——！」

そこにいたのは、全身が真っ赤になった信乃と、彼女に迫る——
妖魔の腕だった。

7

「え……？」

腕が撃ち出されたにも関わらず、信乃の身体は依然としてどこも
挟られていない。

だが妖魔の攻撃は、すべてヒットしていた。

この二つの事象に矛盾は無い。

「が、ぐあっ……」

嘔吐した千草の口から、ぼたぼたと血がこぼれ落ちていく

「千、草……？」

「……よお、無事か、信乃」

串刺しになりながらも、千草は信乃に笑いかけた。

腕が信乃に届かんとした土壇場に、千草が信乃を突き飛ばしたの
だ。

そして信乃を貫くはずだった腕達は、千草の身体へと殺到してい
き、今に至る。

「なに、やってんのよあんた……！」

「なんでつつわれてもな……俺は、足枷になるためにここにいるん
じゃねえよ。こう言うときのために、おまえの助手、やってんだ」

そんな、何気ないような一言が、信乃の心をかき乱す。

助けてくれたことはうれしいのに、それを拒絶している自分がい
た。

『ハハハハハハッ！ いいねエ。お涙ちようだいの三文芝居だア……
でも、もういいだろオ？ いい感じに盛り上がったし、さっさと死
ねよオ』

千草の傷はどれも致命傷。

二分も保つまい。

それでも千草は、そんな様子を微塵も見せていない。

「は……？ 冗談よせよ。誰も俺が死ぬなんて、言っただろう
が！」

メガトーン

〈命我熔音〉が、自身に突き立った腕を粉碎していく。

『なア！？』

驚愕した頃には、妖魔は千草の間合いにいた。

あり得ない――

普通の人間であれば、あれだけのダメージを受ければ一歩足りとて動くことは叶わない。

激痛にもだえ苦しむのが関の山だ。

メガトーン

だが千草は、五体満足と言わんばかりに〈命我熔音〉を妖魔に打ち付けた。

尋常じゃないインパクトに耐えきれず、妖魔の身体は軽々と吹っ飛んでいく。

仕留めるまでには至っていないが、それでも与えられたダメージは大きい。

『なんで、だア……？ 普通、死ぬだろオ！ その傷はよオ！』

唾を飛ばす妖魔に、千草は底意地の悪い笑みを浮かべて見せた。

「普通ならな。けど、生憎俺は普通じゃねえ」

ぞろり、と妖魔の腕が身体から抜け落ちる。

栓が抜けたことで、さらに出血は勢いを増していく。

致死量であるとされるニリットルなんて軽く超えていた。

それでも千草は、コンクリートを踏みしめ、不敵に佇んでいる。

その様は、生命のしぶとさの象徴のようで、実際の所、生命の冒

瀕に他ならない。

信乃を命を賭けて守ったのではない。

そもそも賭ける命なぞ、千草には無い。

「――狂い廻れ、逆行時計」

一瞬、時間が静止したように、血の流れが止まり、再び動き出す。

だが、その流れは、以前とはまるで逆方向だった。

時間をそっくり巻き戻したかのように、千草の元へ還っていく。血も、皮膚も、肉片も、すべて。

やがて、千草の身体には傷一つ存在しなくなった。

それどころか、破けていた制服すらも元通りになっている。

『あ、ありえねエ……何なんだ、何なんだよそれエ！』

その力は、人の、いや生命の原理から叛逆する物だ。

まるで、なんて枕を敷く必要なんて無い。

アレは紛れもなく、自分と同じ力。

人の世の道理をねじ曲げる――妖魔の力だ。

「逆行時計。俺の身体がダメージを受けた瞬間、受ける以前の状態に巻き戻す」対象は俺の身体と、俺が身に付けているものすべてだ。つっても空気だの地面だのは対象外だけだな。対物ライフルぶ

つ放されようが、濃硫酸ぶっかけられようが、巻き戻って全て元通

りつつー、ぶっ壊れ極まりない代物ってワケだ」

妖魔は戦慄する。

どんな攻撃を受けようが、瞬く間にそれらが修復される。

そんなの、不死身と何が変わろうか。

「けどこいつにや弱点があつてな……超強力な必殺技つてのが一切ないんだな、これが」

出来ることと言えば、せいぜい被弾を気にせずに突貫することくらいだ。

だがそれでは、この妖魔を打ち倒すことなどできはしない。

不死身イコール最強という方程式は、この場においては適応されない。

「ムカつく話だけど、おまえを倒すことは俺にはできねえ」

肩透かしを食らった気分になる。

しかしその言葉が事実であることも、妖魔に分かっていた。

『……じゃあ、テメエはどうするつてんだア？』

「決まってるんだろ……仕事終わらせて、信乃とパフェ食うんだよ」

『はア……？』

訳が分からない。

倒せないと言っておきながら、仕事を完遂させるなんて、のっけから矛盾しているではないか。

「おまえを倒すのは俺じゃねえ。俺はあくまでバックアップ担当だから」

肩をすくめて見せる千草の横に、無然とした表情の信乃が並び立つ。

「その、助けられてありがと。けど——」

「説教なら老後の茶飲み話にでも聞いてやる。だから今はあの万年

三下妖魔をぶっ殺すぞ」

ビキリ、と再び妖魔の額に筋が浮かんた。

人間だった頃の記憶が、千草の言葉を触媒に引っ張り出される。

いつも上司に怒鳴られ、同僚からは鼻で笑われていた自分。

嫌いな奴らを殺してやると思っても、それを想像するので精一杯

だった自分。

妖魔となり人を殺せる力を得た後でも、自分に向けられるさげす

みの言葉は、すべて導火線だった。

『馬鹿に、しやがってエ……！』

黒く波打った瞬間、

「オラア——！」

メガトーン

千草は〈命我熔音〉を床に叩き付けた。

『グ——ウツ！？』

波が止み、妖魔の顔が苦痛に歪んだ。

「千草、あれって——！？」

明確に、ダメージを受けている。

今まで何度も村雨に切り刻まれても、笑っていたと言うのに。

「信乃。こいつ今まで痛みを感じてなかったんだよな？」

「うん。でも、なんで？」

「今ので確信できた。あの妖魔は本体なんかじゃねえ。アレはただ

の端末に過ぎなかったんだよ」

千草の言葉に、信乃もその答えへと辿り着く。

「この建物そのものが、妖魔ってワケね」

がじ、と信乃が爪を噛む。

「そゆこと。おかしいと思っただぜ。この程度の妖気で結界が展開出来るわけがねーってな。だとしても、厄介ってことには変わりねーけど」

鉄パイプと日本刀だけでビルを丸ごと破壊できたら、解体技術は今よりも発展しているに違いない。

『はッ、タネが割れようが、オレは負けねェ！ オレは、最強なんだア……！』

そうだ。

そのはずだ。

だって、一回も負けていない。

どんな奴がここに来たって、結末はすべて同じだった。

逃げ惑う人間、殺す自分。

この方程式は崩れない。

崩れてはいけない。

崩れれば、自分がかつての、弱者である自分に戻ってしまう。

「なあ信乃。今の状態でビルぶっ壊せるか？」

「あんたはあたしをなんだと思ってるのよ」

「宇宙一可愛い幼なじみ」

「!？」

「ま、冗談はさておき」

「最低！ あんた最低よ！」

「あだだ！ 仲間割れしてる場合かよ！ 今のおまえじゃぶっ壊せねえってのなら、あの力を使うしかねえだろ!？」

ぴたり、と信乃の動きが止まる。

「……いいの？」

「たりめーだ。何のために俺がいると思ってるんだよ」

ぐいっと袖を引っ張り、首筋を露わにさせる。

『ま、待てェ！ 忘れてねェだろうなア。このビルはオレの手の平の上だ。あのチビを殺すことだって——』

ここで、妖魔が言葉を切った。

その顔には、困惑の色が浮かんでいる。

『何処にもいねェ……どう言うことだア？』

妖魔は、このビルの全てを知覚できる。

それにも関わらず、少年の存在を何処にも関知できない。

「今だぜ、信乃」

「うん……ごめん、千草」

「だから、なんで謝るんだよ」

千草の首筋に、信乃の犬歯が沈み込む。

僅かな痛みと共に、血が流れ出る。

信乃はそれを一滴も逃さないように飲み込んでいく。

——美味しい。

信乃の心を、なんとも言えぬ高揚感と僅かな罪悪感が包み込む。

身体の細胞全てが、千草の血液に歓喜していた。

美酒と言うのはこの血のようなものなのかもしれない。

名残惜しいと思いつながら、首から口を離す。
傷口は、塞がっていない。

「そんなじゃ、先行ってるわ。後は、頼んだけぜ——！」

言う否や、千草は（命我熔音）を投擲した。
メガトーン

『——！』

意味が無いのに、反射的に避けてしまう。

メガトーン

（命我熔音）は壁にぶつかり、大穴を開けた。

『グガアッ……！』

「ビンゴ……！」

妖魔の脇を駆け抜け、大穴へと到達する。

そして妖魔に向かって振り向いた。

「あー、そうだ。ガキが見つからないとか言ってたよな。冥土の土産に教えてやるよ」

何かを剥がすようなジェスチャーをした瞬間、千草の隣に少年が現れた。

妖魔は目を剥いた。

ついさっきまで反応が無かったというのに、何故。

「こいつは、認識を無理矢理逸らすことができるんだよ。言うなれば、お手軽透明人間製造機だ。直接人に貼るのは二回目だけど、やっぱ信乃がバグってるだけで、普通に妖魔の目は誤魔化せるっぽいな」

「なんか釈然としませんね。まるで僕が実験動物みたいじゃないですか」

「細かいことは気にすんなって……そんなじゃ、あばよ三下。せいぜい苦しまずに逝けることを祈ってるぜ」

『逃がすかア……！』

壁を塞ごうとするが、それよりも速く千草が少年を抱き上げ、外へ飛び出した。

まさに間一髪。

こうなってしまうえば、この場所に縛られている妖魔は干渉のしようが無い。

何という屈辱だろう。

せめて、この女だけでも屈服させねば——

『……ア？』

ふと、全身を悪寒が駆け抜けた。

振り向くと、そこには信乃が俯きながら立っている。

しばし魂が抜けたように立ち尽くしていたが、やがて犬歯を剥き出しにして、信乃は吠えた。

咆哮はビル全体に響き渡り、辛うじて生き残っていた窓ガラスを全て破壊する。

血が沸騰するような感覚と共に、変貌が始まった。

全身に浮き出る刻印。

紅に染まる瞳。

額を突き破り展開される隻角。

信乃の身体から発せられる、噎せ返るほどの妖気は、彼女が人間で無いことを如実に現していた。

対魔師が業界内でキワモノとされる理由。

それは妖魔の血を引き、妖魔の力で妖魔を滅する所にある。

言わば、同族殺しの集団だ。

そして信乃は、四宮家の中で最も最悪な変異を起こした少女だった。

妖魔の血が流れているところではない、生粋の妖魔——それも、最上位の存在とされる〈鬼〉。

人として生活できているのは、亡き母が施してくれた封印の術式と、〈鬼〉の力を打ち消せる程の妖気を帯びた妖刀村雨の存在があるからだ。

だが、力を分け与えた眷族である千草の血を利用すれば、時間は限られるが〈鬼〉の力を僅かに引き出すことが可能になる。

『——ああ、なるほど。確かに、建物全体が妖魔化してる。やっぱり千草はすごいなあ。ボクはこの状態にならないとどうも、ぼんやりとしか分からないだよね……』

愉悦と殺意が入り交じった瞳が、妖魔を捕らえる。

『許せないなあ。千草を壊しているのは、ボクだけなんだから。横取りなんて、しちゃいけないんだよ？』

信乃が一步近づくと、妖魔は一步ずつ後退していく。

気付けば、全身が震えていた。

動いても死ぬし、動かなくても死ぬという確信があった。

『起きて、村雨。食事の時間だよ』

鞘に収められた村雨の刀身は、信乃の瞳と同様に真っ赤に染まって

いた。

戦乱の世に生まれ、多くの血を吸い限りなく妖魔に近くなった刀。

それが村雨の正体だ。

『ボクとコイツは、互いが互いの力を拮抗させて封じているんだ。つまり、ボクの力を解放するということは必然的に、村雨を解放するってこと。でもコイツ、一度解放すると所構わず食いまくる悪食さんなんだよね』

最強の妖刀が、最悪の妖魔によって上段に振り上げられる。

刀身に、信乃の妖気が絡みつく。

その様は、力を増強しているようにも、縛り付けているようにも見た。

『だから、こんな風にボクの力で縛りを入れなくちゃいけないってワケ……ふう、そろそろいいかな。さすがに千草達ももう逃げたでしょ』

本来であれば、自分の手の内をさらす必要なんてどこにもない。

あえて口にしたのは、単なる時間稼ぎだ。

巻き込むのは絶対に避けたい——

辛うじて残っている人間としての価値基準が、彼女にそうさせた。

だが、もう十分時間は稼いだ。

もう、我慢しなくてもいいだろう。

『さよなら。ボクの眷族を傷つけた代償は——高く付くぜ』

半狂乱になりながら、妖魔はビルの全てを刃だらけの手に変形させ、信乃の元へ殺到させた。

まさに全身全霊。

切り札と呼ぶのに相応しい妖魔の一撃はしかし、信乃の元へ届くことは叶わない。

『——鬼刃蛮食』

振り下ろした村雨から放たれた巨大な顎門が視界を覆った瞬間、全てがアカに塗りつぶされた。

村雨が発した妖気なのか、自身の血なのか、妖魔には分からない。

認識できているのは、狂い出しそうな激痛と、自分の存在が削られていくような喪失感。

一撃。

たった一撃でこれだ。

勝負にすらなっていない。

そこにあっただのは、一方的な蹂躪と捕食のみ。

そしてそれも、一瞬で終わる。

削れていく意識の中で、妖魔は現実から目を逸らし、もがき続ける。

違う。

こんなはずは無い。

何かの間違いだ。

やり直しを、やり直しをさせてくれ。

あの女が力を解放する前あいつらが来る前ガキと遭遇する前妖魔になる前自殺する前このクソ会社に就職する前生まれる前何でもいからやり直させろ——

どれだけ足掻こうとも、その結末を変える力なぞ残っていないし、元々持ち合わせていない。

自分が崩壊していく音と断末魔の中で、妖魔の意識は途切れた。

8

夕暮れの川辺の道を、二つの人影が歩いていった——と言うには、やや語弊があった。

正確には、一人はもう一人におぶわれている状態である。

ちなみにおぶっているのは信乃。

おぶわれているのは千草なのであった。

「なんだってあんたは、肝心な時に格好付かないのよ……」

「うるへー、俺だって好きでこうなってるんじゃないやねーやい」

千草が脱出したのはビルの二階。

十分死んでもおかしくない高さではあるが、そんな些細なミスをするほど、千草も未熟では無い。

ビルに入る前に、クッションになりそうな物がある場所を、あら

かじめ見て回っていたので、飛び降りた先にゴミ捨て場があることはちゃんと分かっていた。

率先して飛び込みたい場所では無かったが、背に腹は変えられない。

結果として、千草が抱きかかえていた少年は無事だった。

一方千草はゴミ捨て場の金属部に腰を強か打ち付けた。

信乃が鬼化を解くまで逆行時計を使うことができず、あまりの痛みで千草は立ち上がれなくなってしまったのである。

次の瞬間ビルが崩壊したもんだから、踏んだり蹴ったりだ。

ビルの倒壊自体は、四宮の人間がガス爆発だの老朽化だの適当な理由をこじつけてくれる手はずになっているので特に問題はない。

「そう言うおまえは大丈夫なのかよ。どこか異常とかねーのか？」

「無いわよ。そのために千草の血を飲んでるんだから」

「鉄分豊富だったろ？」

「そりゃ血だからね……」

信乃一人だけでも鬼化することは可能だが、暴走する危険性があるのでストップパーとして千草の血を摂取する必要がある。

その後は逆行時計を使って千草の血を千草の体内へ戻すことで、それに付随して信乃の身体も人間の状態へと巻き戻る。

本来だったら不可能だが、信乃が逆行時計の本来の持ち主であるため、それくらいの無茶は利くのだ。

「……それで、あの子はどうなったの？」

「あのガキなら、ビルが崩れる前に帰らせた。『僕はあなた達に興

味を抱きました。また、どこかでお会いしましょう』だとき。冗談じゃねえ、二度と会うかってんだ」

「そ。よかった」

「あーあ、なんだってこんな目にあってたんだか。計画通りだったら今頃ファミレスでおまえとパフェ食ってたつてのによお。こんなだったら、あんなガキ助けるんじゃないか」

文句を垂れる千草に、信乃は苦笑して言葉を返す

「でも、人が目の前で死んじゃうのって、悲しいじゃん」

「そうかあ？ 不愉快には思うけど悲しいとは思わねーな。見ず知らずの他人の死なんざ、そんなもんだろ。俺が助けるのは、俺が助けたと思う奴だけだ」

「でも、結局助けてくれたよね、千草は」

「あ？」

「なんだかんだ言っても、千草は誰かを助けてくれる。あたしだって、何回も助けられてるもん。あ、でも、あまり自分の身を顧みないのはどうかと思うけどね」

「いいだろそれくらい。別に死んでないんだし」

「全っ然よくないんだけど……」

逆行時計があるからと言って、ぼんぼん致命傷を負われてはたまらない。

今は辛うじて踏みとどまっているが、後々何か取り返しがつかないことになるのではないかと、信乃は危機感を抱いていた。

「あと、あのガキとおまえは同じじゃねえよ。あいつの場合はただ

の成り行きだけだな、おまえはちゃんと守ろうって思って守ってんだかんな。そこ忘れんなよ」

その言葉に、頬がかあつと熱くなった。

——俺が助けるのは、俺が助けたいと思う奴だけだ。

なんで、そう思ってくれるのだろうか。

本来信乃は、千草に守られる資格なんてありはしないのだ。

それなのに何故——

「——信乃！」

思考を遮るように、緊迫した千草の声が響く。

「ふえ！？ ななな何？」

「いいか、今から俺の言うとおりに歩いてくれ！」

「え？ あ、うん」

先程とは打って変わった声音に押され、思わず頷いてしまった。

「大股で五歩前進して、右右右……ストップ。ってちよいズレたな。もうちよい左左左……」

なんかスイカ割りをやってる気分だ。もう秋なのに。

「よし、完璧……っと、やっぱまだ痛えな」

信乃から降りた千草は、少し顔を歪めながら腰をさすった。

「大丈夫なの？」

「回収するくらいなら平気だったの」

「回収？」

はて、なんのこつちやと視線を落とす。と、

「……ん？」

雑草の絨毯に置かれていたのは、色っぽいと言う言葉が過小評価になってしまふようなおねーさま方が大写真になった雑誌——つまりは、エロ本であった。

「ラッキーラッキー、きつと俺の活躍を見たカミサマが置いてくれたんだ。おっ、しかもきよぬーモノじゃねえか。やっぱ俺の日頃の行いが善かったからに違いねー」

うっひよーと無邪気にはしゃいでいる千草は、気付いていない。

背後の幼なじみが、射殺さんばかりの殺意を放っていると言うこと——！

「千草……」

「ん、どした信乃？」

「その煩惱まみれの頭、冷やしてこいやああああああああああああ！」

「ばぎやぶっ」

竹刀袋に殴られた千草の身体は、発泡スチロールのように軽々と吹っ飛び、川へ落ちていく。

冬の足音が徐々に聞こえてきそうな秋の日に、暗い陽光が、水飛沫を紅く照らした。

あとがき

皆様初めまして、半熟紳士です。

この『対魔少女と逆行時計』は、同名義で「小説家になろう」で

連載している小説のスピノフもしくは前日譚みてーな感じでござ
います。

そちらも読んでいただけるととっても嬉しいです、うえっへっ
へっ(ゴマスリ)。

それはさておき、この小説は所謂「伝奇モノ」です。

日常に潜む異形との戦いに身を投じる少年少女の物語——みたい
な感じですね。

書いたが最期、厨二病の完治が絶望的になるという、中々に業が
深いジャンルなんだそうです。どひゃー

千草と信乃の物語は他にも色々書きてーなーと思っているので、
またこの部誌に二人がひょっこり出ることもあるかもしれません。

その時は、生暖かい目で見守っていただければ幸いです。(さす
がにもっとコンパクトに書きたいですが……)

ではでは

五月二十七日『Marshmallow Justice』を聴きながら

追伸

『対魔』というワードをグーグル検索するときは自己責任でお願い
します。いやマジで